

精神・発達障害者のニーズや障害特性に応じた障害者職業訓練の訓練効果の評価

東京障害者職業能力開発校 三宮 康彰

1. はじめに

東京障害者職業能力開発校（以下「当校」という）は、一般の職業訓練施設では受講が困難な障害者を対象とする国立都営の職業能力開発施設であり、身体的および知的・精神的な事情に配慮しながら、それぞれの生徒の能力に適応した訓練を実施している。

近年、共生社会の実現に向けて障害者の法定雇用率の引上げや雇用支援策の強化が進み、令和7年度の厚生労働省検討会報告においても、多様化する求職障害者の動向とニーズの把握、障害特性に応じたきめ細かな訓練、重点的な受入対象範囲の拡大、就職支援・定着支援の強化等が今後の方針として示されている。加えて、障害者訓練の受講者構成は、身体障害中心から精神・発達障害中心へと大きく変化しており、訓練現場では、障害特性に応じた細やかな訓練指導や就職支援の必要性が急増している。

そこで本稿は、精神・発達障害者に特化した職業訓練科目における訓練と支援の実践事例の検証を通じて訓練効果の評価を行い、障害者職業訓練が今後より高い水準で役割を果たしていくための方向性について考察する。

2. 職域開発科の概要と特色

平成17年の障害者雇用促進法改正および、翌年4月から精神障害者が障害者雇用率の算定対象に加えられたことによる、精神障害者と企業双方の職業訓

練へのニーズの高まりを背景として、当校では平成20年に精神障害者の受入れを試行的に開始、平成25年には精神・発達障害者に特化した職域開発科を開設した。科目の概要は表1のとおりである。

表1 職域開発科の概要

訓練種別	短期課程6か月 障害者訓練
定員	10名
総時限数	680時限
訓練対象	精神障害者保健福祉手帳所持者および、医師から統合失調症・躁うつ病・てんかんの診断を受けた者（発達障害者も該当）
訓練目標	生徒が障害への理解・認識を深めることで自らにふさわしい職業選択を行い、社会適応能力と専門的技術・技能を習得することで、就職および職場定着を目指す

当科の最大の特長は、一般的な職業訓練のように専門的技術・技能の習得だけを目指すのではなく、職業選択と社会適応能力の習得を本格的に訓練内容に組み込んでいる点にあり、特色を整理すると次節からの5項目にまとめることができる。

2.1 社会適応能力訓練

既往調査では、精神障害者は他障害に比べて職場定着が難しく平均勤続年数が短く、離職理由として人間関係や症状悪化など社会適応面の課題が多いことが示されている。このため当科では、総訓練時限の41%を社会適応能力訓練に充て、専門的技術・技

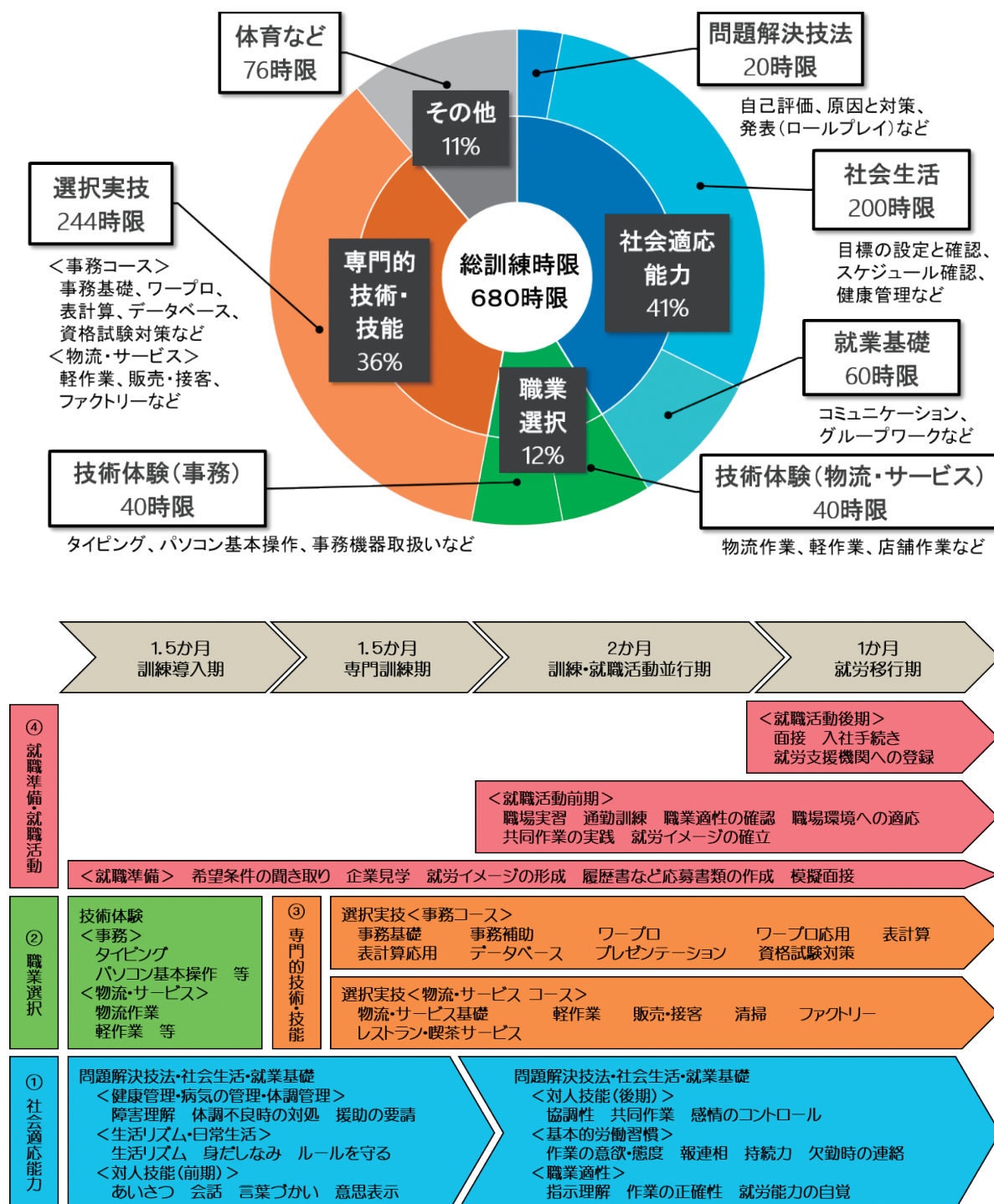


図1 職域開発科の訓練の内訳と流れ

能訓練と並行して実施している（図1）。

訓練は、問題解決技法やグループワーク、ソーシャルスキルズトレーニング（SST）といった手段を通じて、障害理解や不調時の対処、コミュニケーションや協調性など、職業準備性に関する能力の習

得・向上を目指すものである（図2）。単に知識として教えるだけでなく、目標設定と実践体験、振り返りというPDCAサイクルを繰り返すことで、職場で表面化しやすい困りごとに備える点に特徴がある。

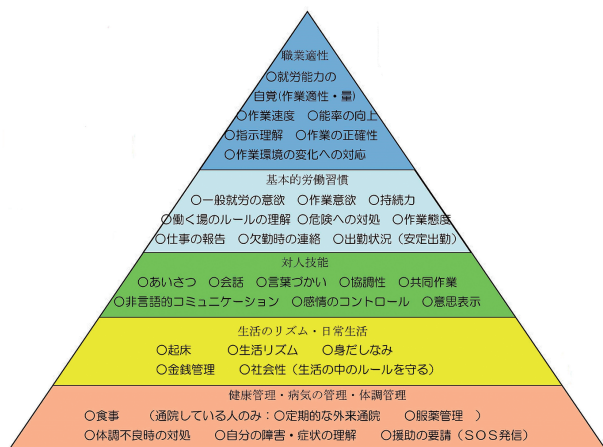


図2 職業準備性ピラミッド

2.2 訓練導入期の技術体験とアセスメント

当科では、入校後およそ1.5か月を訓練導入期と位置付け、6時限を目安とした短時間訓練により生活環境の変化による負荷を軽減し、通校の安定化を図っている。そのうえで、パソコン作業や軽作業など多様な職業体験を行う「技術体験」を実施する。

生徒は、体験を通じて興味の有無や得意・不得意を実感し、自分にふさわしい職業選択について思考を深める。一方、職員は就労可能性を見据えながら各作業場面を注意深く観察し、技能面・社会適応面の能力、適性、障害特性を見極めるアセスメントを行う。導入期の終わりには、生徒は得られた経験に基づき、自らにふさわしい職業に就くための訓練コースとユニットを選択する(図3)。

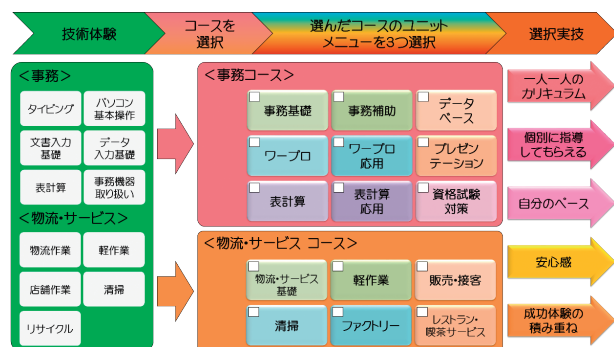


図3 訓練コース・ユニットの選択から選択実技への流れ

2.3 個別指導による専門的技術・技能訓練

導入期終了後、生徒は産業や企業のニーズに即した専門的技術・技能の習得を目指す訓練へ移行する。コースとユニットの選択後は、生徒一人ひとりがそれぞれ異なるカリキュラムで個別訓練を行う。一般的な一斉訓練とは異なり、個別指導のもと、自分のペースで取り組める安心感の中で、小さな成功体験を1つずつ積み重ねながら自信を形成し、就職に必要な職業スキルの習得と向上を目指す点が重視されている。精神・発達障害者にとって、速度や量を一律に競わせるより、適切な難易度設定のもとで成功経験を重ねることが、自己効力感の形成と訓練継続の双方に重要である。

2.4 個別ニーズに対応した就職支援

精神障害者が就職先で長く働くためには、生徒が社会適応能力を身に付けるだけでなく、本人の希望条件、障害特性、必要な配慮に適合した働き方や職場環境を見つけることが不可欠となるため、当科では生徒一人ひとりに応じた就職支援を行う。支援は、就職そのものがゴールではなく、就職後に無理なく働き続けられるかという観点に立ち、本人の希望条件や将来ビジョンの聞き取りから始め、障害者就労現場の見学等で就労イメージの形成や就職意欲の喚起を行いながら、応募書類作成や面接、職場体験実習を積み重ね、就職および職場定着へと繋げている。

2.5 専門的技法による指導・支援

職域開発科では、精神・発達障害者に対して効果的な訓練を行うため、担当職員が専門知識や理論に基づく専門的な技法により指導・支援を行っている。具体的な技法は以下の5つである。

● 生徒との信頼関係の構築

生徒がこの場に身を置いている事実を尊重し、話し合いを重視しながら成長を助ける討議モデルでの対応を意識し、傾聴だけでなく積極的な説明や助言も行う姿勢で自立を後押しする。

- 自己効力感を高める

小さな成功体験の積み重ねや仲間の成功体験に触れられる環境を整え、劣等感や無気力を生む認知の歪みを補正しつつ励ますことで、「自分にも克服できそうだ」という感覚を高め、新たな挑戦を可能にする。

- 勇気づけ

結果だけでなく過程における努力や頑張りに焦点を当てた声掛けを行い、困難を克服する活力と目標への自発的行動を引き出す。

- 問題行動場面における対処

問題行動を肯定的な自己評価を維持・獲得しようとする行為と捉え、指導側は適切な距離で一貫した姿勢で接する。自分の考え方や行動を変えることなく、周りの人間を利用して自分の不快さをなくす、負の循環を防ぎ、多様な視点を示しながら、本人が自分自身で対処し社会と調和する行動をとれるよう支援する。

- 共同への意識づけ

周囲や他者との信頼や結びつきを感じられる共同体感覚を得る体験を通じて、仲間への感謝やお互い様の精神を養うことで、自分に価値があるという感覚や課題に向き合う勇気の形成を促す。

3. 実践事例の紹介

ここでは、当科の修了生の中から、個別性や特殊性の極めて高い例外的な事例を除いた、多くの事例に共通性の高い代表的事例について紹介する。なお、できる限り正確かつ客観的に訓練効果を評価する観点から、受講率の低い中途退校者や未修了者は除外し、就職を果たした修了生と未就職となった修了生の双方から事例の抽出を行った。

【事例1】失敗を恐れずチャレンジできる環境が自己肯定感向上につながった例

訓練生Aは注意欠如や多動傾向、短期記憶の弱さから間違いや物忘れが多かった。快活に見える表情の裏で常に緊張し、自覚のない疲労やストレスを蓄積しており、思い通りにならない状況では感情のコントロールが難しい状況であった。

訓練では、メモ帳の活用等により間違い・物忘れ対策を習慣化し、正確性や作業速度も向上した。訓練環境への安心感から、積極的な取り組み姿勢や、作業系での得意分野を増やす意欲が生まれ、物流・サービスコースを選択し専門スキルを身に付けた。また、対人関係の苦手意識を克服するため、SSTで学んだ対人スキルの実地訓練として見学者応対を段階的に実施し、最終的には訓練の説明を職員と共同で行えるまでに成長した。

就職活動は個別支援により無理のないペースで進め、職場実習で表面化した自己の課題についての面談や対策訓練を繰り返すことで、修了後には希望する企業・職種への就職を果たした。信頼関係の構築や小さな成功体験の蓄積により、過度な不安や緊張、対人苦手意識を大きく軽減することができた。

【事例2】自分のペースで課題に向き合い、体調に合わせた働き方の理解が進んだ例

訓練生Bは中途障害者で、障害受容姿勢やコミュニケーション能力の高さなどに関する職業準備性は、入校時において既に高かったものの、完璧主義傾向が強く、易疲労性のコントロールが課題であった。

訓練では、体調管理行動の習慣化を優先し、自分のペースで訓練できる環境を整えた。「1時間をめに1回休憩」といった性質に合わせた緩やかなルール設定やタイマーの活用により、自分から休憩や水分補給を申し出る訓練を継続的に行い、体調変化と見通しを意識し、無理なく継続できる疲労コントロール方法を身に付けることに成功した。完璧にこなそうとして疲労感が出た際には、努力を認め目標

ハードルを下げる助言を継続したことで、表情に余裕が生まれ、出席や履修を安定させることができた。

就職活動では、体調とのバランス面でマッチする企業開拓から始め、応募書類作成や半日職場体験など、体調変化に注意しながら無理のないよう支援した結果、特技を活かせる職種での就職に繋がった。勇気づけにより完璧主義傾向を原因とする認知の歪みが補正された結果、他者評価への過敏さや頑張り過ぎが抑制され、体調優先の働き方が可能となった。

【事例3】 認知の歪みへの気づきや障害特性の把握を経て、精神的成長に至った例

訓練生Cは温和で真面目、主治医意見書でも就労可能性が示されていたものの、人生への強い諦めと自己否定、就職不安の訴えが訓練初期に毎日続き、不安と緊張による慢性的疲労感や希死念慮の訴えもあり、訓練や就職活動を慎重に進める必要があった。

訓練では、過去職場での負の体験が人生への諦めの主要因であったため、就労中の修了生との面談を通じて、障害者就労への安心感と期待感を持てるように、就職への動機づけから始めた。最も苦手な報連相については、成果が見えにくい期間が長く続いたが、努力の姿勢を認める勇気づけを継続して行い、日々練習を重ねた結果、大きな改善が見られ自信の回復に繋がった。また、やり方を理解すればミスなくできる成功体験を積み重ねたことで、自発的な行動や発信が増えていった。職場を想定した訓練の中で、報連相や復唱確認の習慣化に取り組みつつ、パソコンスキルの向上に努めた結果、実務レベルのパソコン資格まで取得することができた。

企業での面接や職場実習を重ねるごとに、共同作業や自己成長に積極的に取り組む姿勢が形成された結果、修了後には希望する企業・職種への就職を果たした。努力のプロセスを認めるフィードバックと励ましが、固着した認知の歪みを緩め、疲労や希死念慮の訴えを消失させると共に、失敗を次に活か

し、周囲への感謝を示すまでの劇的な精神的成長に繋がった。

【事例4】 成功体験を積み重ねたものの、不安や囚われが根強く就職活動を断念した例

訓練生Dは過去の職場でのトラウマ体験から、他人への警戒心と恐怖心が強く、不安・緊張による疲労や表情の硬さが目立った。表情が乏しく、相手の立場や感情を理解することへの難しさがあるなど、対人面の課題が大きく、障害や就職に向き合うことを回避したい様子も見受けられた。

訓練では、励ましを受けながらさまざまな作業に取り組む中で、苦手意識を克服しようとする姿勢や自信を取り戻していく様子が見られた。選択した事務コースでは、苦手な報連相のスキルアップに取り組み、パソコンスキルも向上させることができた。また、イベント運営を通じた仲間との共同作業の中で、練習を重ねて変化しようとする姿勢や、過去を肯定的に捉え直そうとする意識の変化も見られた。

しかし、リクルートスーツの着用を契機に過去への囚われが増大したことにより、就職への不安と消極的姿勢が強まり、就職活動を前向きに進めたいと思いと不安で動けない感情の両面が現れるようになった。最終的に、さまざまな体調不良の訴えや主治医・家族の意見を理由として、訓練中の求職活動を中止した。過去のトラウマ体験と就職に対する不安の強い結びつきに対し、認知を変えて消化できるよう助言を続け、焦らず寄り添うことで、過去を前向きに捉え直す発言や、対人面の課題に真摯に向き合う姿勢の形成までは進んだが、就職には至らなかった。

【事例5】 課題理解は進んだものの、病状悪化により就職に結び付かなかった例

訓練生Eは前向きで助言も素直に受け入れる姿勢を示す一方、相手との関係性によって二面性のある言動や態度が見受けられた。入校時点で家庭内に問題も抱えていたため、問題によりストレスが増大した場合の精神・行動面への影響が懸念されていた。

訓練では、周囲の状況に合わせた適切な判断を行うことへの難しさに対し、うまくできた点のフィードバックや、状況確認に関する助言を積み重ねた結果、周囲に失礼のない行動を意識できるようになった。また、作業の目的ややり方の理解にズレが生じやすい特性上の傾向はあるものの、自ら確認してミスを修正し、前向きに取り組む中で、パソコン作業や報連相、協調性に関するスキルも向上し成功体験を積み重ねることができた。

就職活動は、生活リズムの安定とビジネスマナーの習得を優先しつつ、障害者就労への理解と動機づけを目的とした企業面談からスタートしたものの、家庭問題によるストレス増大で病状が悪化し、活動は中断となった。前半に築いた信頼関係と成功体験の蓄積はあったものの、被害意識への囚われが強まり、他責的言動や反抗、拒否が繰り返されるようになった。職員が社会生活面での課題に向き合う姿勢を一貫して示し続けた結果、終盤には態度が軟化し、社会性を意識した行動や仲間へ感謝を示す姿勢も見られたが、残り期間が短く、十分な技能習得や就職活動の再開には至らなかった。

4. 事例分析による訓練効果の評価

紹介した事例をもとに、当科の特色5項目を対象として分析・評価した結果を表2に示す。技術体験（項目2）と専門的技術・技能訓練（項目3）は、事例にかかわらず安定して効果を発揮しており、それ以上に高い効果を示したのは社会適応能力訓練（項目1）と専門的技法による指導・支援（項目5）であった。一方で、個別の就職支援（項目4）については、病状の不安定さ等により、支援段階に乗り切れず効果が十分でないケースも確認された。

また、各事例を横断分析した結果、訓練効果が大きく現れるケースには一定の共通性があることが分かった。

第1に、訓練導入期から選択実技までを通じて、失敗ができるという心理的安全性が確保されていることが、チャレンジ行動の増加につながっている点である。例えば、事例1では見学者応対という対人

表2 事例分析による訓練効果の評価

評価項目	事例					総合評価
	1	2	3	4	5	
1 社会適応能力訓練	◎	◎	◎	◎	○	効果が高い
2 訓練導入期の技術体験とアセスメント	○	○	○	○	○	一定の効果あり
3 個別指導による専門的技術・技能訓練	○	○	◎	○	○	一定の効果あり
4 個別ニーズに対応した就職支援	○	◎	○	△	△	効果が十分でないケースもある
5 専門的技法による指導・支援	◎	◎	◎	◎	◎	非常に効果が高い

※表中の印は、各項目による訓練効果の高さを表す（高い順に◎→○→△）。

場面への挑戦が、事例2では休憩を申し出るという自己管理行動への挑戦が、事例3では報連相の継続練習が心理的に安全な環境の中で積極的に行われたことで、自己肯定感や自信の回復、意欲の向上に繋がっている。

第2に、社会適応能力訓練（項目1）や個別の就職支援（項目4）、専門的技法による指導・支援（項目5）の各項目が相互に連動している点である。例えば、ビジネスマナーの習慣化、自身の障害の理解や受容なども、それ単体では効果が限定的であり、日々の訓練の中であらゆる視点からさまざまな取組を、生徒にとって適切なタイミングでアプローチすることが重要となる。各項目の相乗効果を意識した指導や支援を行うことで、生徒自身の行動が生まれ、定着することに繋がっている。

第3に、入校時において就職活動に移行可能な程度まで病状が安定した状態にあり、自身の障害を理解し受容を深めたいとの意欲が現れていた点である。

事例1～3では、病状の安定と障害受容への意欲により、小さな成功体験の積み重ねが本人の認知や行動を変え、次の挑戦につながる循環を形成することができた。その結果、訓練や就職活動がスムーズに進まない状況でも、不安や困難を乗り越える力を身に付け、就職に繋がっている。

以上を踏まえると、今後就労困難性の高い障害者の受入れを拡大し、多様化する求職障害者のニーズ

に添えつつ、効果を最大限に高めた訓練を実施するためには、訓練全体を連動する1つの指導・支援過程として設計し、生徒の状況や課題に応じた訓練内容の調整や、柔軟な訓練時間の配分や延長により、安心して取り組める環境を整備する視点が不可欠だと考えられる。

5. おわりに

冒頭で述べたように、障害者訓練の対象は、精神・発達障害中心へと大きく変化しており、それぞれの障害特性に応じた細やかな訓練指導や就職支援の必要性が急増している。紹介した職域開発科の実践は、精神・発達障害者に対する職業訓練において、専門技能の習得だけでなく、障害理解の促進や社会適応能力の向上、就職支援や定着支援を一体的に進めることの有効性を具体的に示したものといえる。

今後は、職域開発科で得られたノウハウを他の障害者校や一般校とも共有することで、多様化する求職障害者のニーズや、さまざまな障害特性に応じたきめ細かな訓練指導と就職支援の強化、就労困難性の高い障害者の訓練受入れ拡大に繋げたいと考えている。

誰もが障害に関係なく、希望や能力に応じて職業を通じた社会参加のできる共生社会の実現が、今後一層進んでいくよう全力で取り組んでいきたい。

〈参考文献〉

- 1) 厚生労働省、障害者職業能力開発施設における障害者職業訓練の在り方について、2025, <https://www.mhlw.go.jp/content/12602000/001509203.pdf>
- 2) 高瀬健一、大石甲、西原和世、山本美奈子：「障害者の就業状況等に関する調査研究」、調査研究報告書 No.137、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター、2017
- 3) 福井信佳、中山広宣、橋本卓也：「大阪府における精神障害者の離職に関する研究」、日本職業・災害医学会会誌、60巻、1号、2012
- 4) 厚生労働省、平成25年度障害者雇用実態調査結果、2025, <https://www.mhlw.go.jp/content/11700000/gaiyou.pdf>
- 5) 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構山梨支部 山梨障害者職業センター、職業準備性のピラミッド（就労移行支援のためのチェックリスト・リンク版）、2025, <https://>

www.jeed.go.jp/location/chiiki/yamanashi/q2k4vk00000360vz-att/q2k4vk000003b0yc.pdf

- 6) 西垣悦代 編著：「発達・社会からみる人間関係 現代に生きる青年のために」、北大路書房、2009
- 7) アルフレッド・アドラー著、岸見一郎訳：「人生の意味の心理学（上）（下）」、株式会社アルテ、2010